

サンホセ日本人学校（以下：サンホセ）とアグアスカリエンテス日本人学校（以下：アグアス）の5年生は、2週間に渡り6回（オリエンテーションを含めると7回）、遠隔合同授業を行いました。

小学部第5学年のサンホセ1名（Aさん）、アグアス2名（Bさん、Cさん）を対象に、社会科における「これからの食料生産とわたしたち」の単元に取り組みました。

**1つ目は**、児童一人に一台のiPadを配布し、授業支援アプリケーションである「ロイロノートスクール」をZoomと併用して使用したことです。ロイロノートスクールでは、ワークシート等の配布や回収、比較提示などを行うことができます。また、考えを記述し、互いに送り合ったり、資料を共有したりすることも可能です。Zoomを使用する端末と、ロイロノートを使用するiPadを手元において、授業を進めていきました。こうした環境を整えることで、実際の教室で行えることを遠隔授業においても程度可能にすることができました。また、遠隔授業においても双方向のやり取りがし易くなったため、協働学習を行いやすくなり、オンラインアクティブラーニングを支える柱になったと思います。

**2つ目は**、児童を主体として授業を展開するための手立てです。児童同士が直接的に関わるように、できるだけ教師が介在しないように関わるようにしました。サンホセのAさんは授業ではいつも教師と一対一で関わっていたため、オンライン上で初めて会う人に意見を伝えたり、話し合いをしたりすることは難しいようでした。そこで教師ではなく、子どもがファシリテーターをするルールをつくりました。これを本実践では、子どもファシリテーターシステム（以下：CFTシステム）としました。毎回の交流場でファシリテーターを決めて、その子どもがファシリテーターになって、話し合いを進めます。

## 遠隔合同授業 における工夫

子どもがファシリテーターとして振る舞えるように、話の進め方や心構えをまとめた資料を事前に共有しました。交流初期では、児童は資料をみて進めていましたが、授業を重ねるごとに、即興的に話し合いを進めていく事ができるようになりました。このCFTシステムの良い点は、教師から意見を聞かれるよりも、児童同士で意見を出し合う方が、児童が自身の意見を言うハードルが下がるということです。最初の頃は、児童の話合いがなかなか進まず、教師が介入することもありました。だんだん子どもたちだけで話す事ができるようになりました。また、ファシリテーター経験者には話し合いの仕方や視点が備わり、ファシリテーターを務めない場面でも積極的に話し合いを展開することができるようになっていきました。



このように、CFTシステムを導入することで、少しずつですが子どもたち同士で話し合いを活発に深めていく事ができるようになりました。次回は、授業で取り入れた話し合いの思考法や、独自のシンキングツールについてお話したいと思います。

報告：サンホセ日本人学校 宮本 豪先生  
（担当教科：国語（中）社会（全）  
図工（全）美術、道徳（中））

ヒアリング：AG5 研究補助員 関 温理

10:29 9月29日(火)

戻る

カメラ  
あ  
テキスト  
Web  
地図  
ファイル  
ダウンロード  
テキスト

資料箱  
提出

宮本 豪  
5年1組  
【3時★】これからの食料

しくりょうかくは  
**食料確保ゲーム**

ルール

① 9つの料理の中に、食料自給率50%以上の料理が3つある。それを当てる。  
ほかの6つはすべて50%未満。

② 制限時間は20分間

2020.9.29 シャカ・イカチャート

どうして“国産”は安全なの？ それは本当？

どうして努力せ工夫するの？

よく見えるから～

資料 (3つ選ぶ)

- ① お肉のナゾの番号
- ② たくさんの顔
- ③ おいしさアプリ
- ④ 食べる通信

資料 (3)

資料から分かったこと

- ・買う人が安心できるように工夫している
- ・味を、AIの力で野菜の味を見分けてアプリを使っている人につたえる。

資料 (1)

牛の耳についているたくでその牛がいつ、どこで、生まれたか分かるし牛の種類も分かる

資料 (2)

その野菜、果物の生産者(関係者)の人の顔、個人情報、生産者のIDなどが、かいてある。シールや看板に貼ってある。

資料 (検査所)

外国から来た物には検査している箱にはないから安心安全だ

検査して